

都道府県別賞一等

保険は、夢に向かって羽ばたける翼

北海道 藤女子中学校 一学年

前田 海音

「夢とお金の問題は、いつもセットだ」と両親は言う。夢とお金は、中学生の私にとっては対極にあるものに思える。しかし、両親が私にそう伝える理由を知った時、愛情はお金ではあがなえないものの、お金の生命を吹き込むことはできるのだと確信した。

母が十歳の時、祖母が大病を患った。医療保険には未加入で、生活は苦しかった。母は奨学金の貸付を受け進学した。そのため卒業後の進路は、奨学金が滞りなく返済できる職業かどうかで決めた、と母は言う。一方父の両親は、家庭の経済事情から進学を断念した。それゆえ父には第一志望の進路選択を叶えてほしい、と夢を託した。父は郷里を離れ希望した大学へ進学。そこで学んだ分野で働けていることを、両親に感謝していると言う。

夢を叶えるのに、必要なものはもちろんお金だけではない。心身の健康や、地道な努力、タイミングなど様々な要素が絡み合う。しかし、お金の不安が夢への挑戦を阻む壁になることも事実だ。両親は入籍した時、結婚式を挙げない代わりに、お互いを受取人にしていくつかの保険に加入した。もしかしたら授かるかもしれない子供たちに、経済的な理由で挑戦することを諦めてほしくない。そして夢を叶えてほしい、という願いは、保険加入という具体的な行動に繋がったのだと言う。

私は現金での預貯金ではなく、なぜ保険を選んだのかと両親に質問した。「預貯金は三角、保険は四角」という言葉があるそうで、預貯金は途中で亡くなった場合には積み立ての元利合計が戻ってくるのに対し、生命保険は万が一のことがあった場合、加入したその日から保障額が受け取れる。「まさか」は常に十分に預貯金ができた時起こるわけではなく、備えは三角の預貯金では間に合わない時もあるだろう。そのため両親は「安心」も準備できる保険をまずは選んだとのことだった。

「預貯金と保険の両方を組み合わせてライフプランを考えることで、人生の地図になるんだよ。」と父は言いながら我が家のライフプラン表を公開した。そこで私は自分が何をしたいのか、どう生きたいのかを考えるきっかけを得た。十年後、二十年後、どんな未来を迎えたいだろう。人生の軸を決めると、それは選択に迫られた時の指標となる。ライフプランとして可視化されることで具体的に将来必要になる金額が予想できる。また自分がコントロールできるものとできない

第62回中学生作文コンクール

ものを把握し、対策することにも役立つ。

私は理学療法士になる夢があるので、養成校の学費を調べてみた。大学か、または専門学校か、公立か私立か。学費にかなりの幅があることを知った。また三歳上の兄がどのような進路を選ぶかで、我が家の財政は大きく変動することも理解した。加えて両親の退職時期なども目の当たりにし、自分を取り囲むお金の問題を認識できた。家族一人一人に合わせたライフプランという地図は、私たちが家族の人生という航海には必須だ。人生は成り行き任せ、という側面があることも否定はしない。しかし、人生は選択の繰り返しなら、「なりたい自分」への道のりを設計し、選択した目標に向かって努力できる自分でありたい。それが、私に夢を託してくれた両親や、支えてくれる社会への恩返しだと思ふからだ。

保険は今の自分と将来を守るだけではなく、受け継がれる次の世代を守り続けるもの。その基本精神は相互扶助と自助の精神であり、家族やコミュニティに向けての愛である。人間には困っている人を助けたいという本能があり、一方で、いつ助けられる側になるかはわからない。誰かを支え、また支えられているという想いが人を強くする。それはSDGsの根本理念である「誰一人取り残さない」とも一致した考えとも言える。私は保険という、夢に向かって羽ばたける翼を与えてくれた両親と、相互扶助を支える人の繋がりに感謝する。そして今、ライフプランという地図を頼りに、大人への一步を踏み出していきたい。